

内田先生わかりません

『先生はえらい』

内田樹 著
定価 798 円(本体 760 円+税 5%)
ちくまプリマー新書 筑摩書房 ☎048-651-0053



坂田三允

日本精神科看護技術協会・専務理事

「はじめに」によれば、本書は中学生や高校生を対象にした新書の中の1冊だそうである。しかし、これは奥の深い難しい本である。活字離れが進んでいるといわれる今時の中学生や高校生のうち、何人がこの本を手にとり、最後まで読み通すことができるのだろうと思うと……。いや、難しいと思うのは私であって、それをすべての人に当てはめるのはもちろん間違っているのだが、難しかった。

だって(ここは、なぜならばではなく、だってと言いたい気分なのである)、ラカンが出てくるわ、フロイトは出てくるわ、マルクスは出てくるわで、ちっとも前に進めない。著者が言いたいのはこういうことなのかなあとは感じつつ、自分の言葉に直せないまま(ということは、納得できるほどにはわかっていないということだ)、ずるずると読み終えた。消化不良感がつきまとう。

しかし、本書の最後は「え、ここまで読んだけれど、ウチダが何を言いたいのか、わからない?『あなた、こんな本書いて、いったい何がしたいんですか?』うむ。免許皆伝じゃ。では老師はこれにてご無礼いたす。御免。」と締めくくられているので、まあこれでいいのかなとも思う。消化不良感是不快だから、ここに引っかかりつつ、私はその不快感を解消するための行動を起こすだろう。それは他者と話すことであったり、本を読むことであったり……。それは、私にとって学ぶということなのだが……。

裏表紙のコピーによれば、本書は「誰もが幸福になれる、常識やぶりの教育論」なのだ。よって、本書では先生とは何か、学ぶとはどのようなことなのか、先

生と弟子の関係とはどのようなものかについて語られる。

曰く、「『誰にとっても、いい先生』などいうものは存在するはずがない」。はい、お説ごもっとも。

「先生というのは、あちらからみなさんのところにやってくるものではありません」。確かにそうですね。では、学ぶというのはどういうことなのか。

「自分がこの世界でただひとりのかけがえのない存在であるという事実を確認するために私たちは学ぶのです」。えーっ! 学ぶってそんなに大それたことなんですか?

「弟子たちは先生から決して同じことを学びません。ひとりひとりがその器に合わせて、それぞれ違うことを学び取って行くこと。それが学びの創造性、学びの主体性ということです」。それは、そうですが……。それが「『この先生のこのすばらしさを知っているのは、あまたある弟子の中で私ひとりだ』という思いこみが弟子には絶対に必要です」「だから私は生きなければならない」ということにつながるのでしょうか?

ここまで書いてきて、昔、解離性(転換性)障害の患者さんが言っていたことを思い出した。「私は自分に確信がもてないから、知識で確信したいのよ」。彼女は確かにそう言った。デブだのブスだのいわれて傷つきつつ、でもデブで何が悪いと開き直って能天気生きてきた私は、「あー、そんな風に生きていくのはとてもしんどいことだろうな」と返す言葉をなくしていた。

人が学びたいと思う動機にはさまざまなものがあるのだと改めて思う。



【坂田三允さんの講演があるそうです】

8月20日(土)・9月10日(土)15:30~17:30に朝日カルチャーセンター(東京都新宿区)で坂田さんの講座があるそうです。テーマは「入院や病気の周辺にあるストレス全般の対処法」です。問い合わせは朝日カルチャーセンター(担当 櫻井さん)まで。

さかたまよし◎このコーナーは、本年からほんの少しリニューアルいたしました。編集部が精神看護に関係のありそうな書籍を選び、それを読んで書くということになりました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。